

4 やそばの清水

さみだれの空にまかせてこのごろはせきこそやらぬ野沢井の水

朝ぼらけ野沢の霧の絶え間より立つ白鷺の声の寒けき

今では、もつぱら、「やそばの清水」と呼びならわされているが、古くは「野沢の井」と言つて、よく古歌にもよまれている。

「弥蘇場」「八十蘇場」あるいは「八十八」と書いて「やそば」と読ませるのは「讚留靈王記」という伝説書、それから出ている。

南海に住む悪魚・それを征伐に出かけた讚留靈王の水夫たちが、その毒氣にふれてばたばたとたおれる。そこへ天童が現われ「やそばの靈水」を注ぐ。すると不思議に、八十八人の水夫たちが、たちまち息吹き返して蘇生したという。その話からきた地名で、附会の説である。しかし、ともかく古くから当国一の靈泉と名をつく所には薬師如来がつきものだが、このやそばの場合はよほど離れたところ

ろにまつつっている。

清水の右手、金山の山腹に小さいため池がある。その水中にある石仏がその薬師如来でこの台石の下から地下をくぐつてふもとの「やそば」にわき出る。それでこの水には靈験があると昔から信ぜられてきた。

今も、わざわざ遠方から一びんの水をくみに来るといふ。病人に飲ませたり、「まつごの水」にするらしい。

清水のすぐ東は崇徳天皇の社がある。天皇は長寛二年八月二十六日府中の鼓岡でなくなられた。

「一刻も早く…」と都へ注進はしたが、何分残暑の折りであつた。都のごさたも待たねばならぬし、何かと、それまでにはご安泰な処置が望ましい。それでとりあえず、ご靈きゆうを靈泉のある「やそば」にうつし、その水中に安置したと史書に伝えられている。

そのゆかりで、今もここに天皇の社がまつられているのである。

その後、ご霊きゆうは白峯にうつされたのはもちろんであるが、「やそばの清水」
…それは、いわば天皇の霊水でもある。

現在この霊水を引く農家は十二・三軒、田にして二町四反ばかりである。

“崇徳天皇のやそばの水は、澄まず濁らず出ずまさず…”

今の里人は、こう歌っているがこの霊水・それは今後も長くやそばの里をうる
おすことであろう。